てんかん患者の日常生活考える

市民公開講座

てんかん患者の日常生活を考える市民公開講座「てんかんとともに暮らす」が6月29日、鹿児島市の県医師会館であった。約80人が参加し、学校生活など患者が暮らしやすい対応などを学んだ＝写真。

講座は日本脳神経外科学会九州支部などが開いた。鹿児島大学病院てんかんセンターの花谷亮典センター長は、仕事や友人関係などに問題を抱え、社会的はざまに入り込んでしまう患者がいることを指摘。「教育機関や患者団体との連携、社会制度の活用が欠かせない」と呼び掛けた。

学校生活について同センターの丸山慎介医師（小児科）は「プールや課外授業などで制限が少なくなるよう最善の選択を考えてほしい」。鹿大教育学部の石走知子准教授は「症状を誰にどの範囲まで伝えるのか、保護者と学校で十分な話し合いが必要」と指摘した。

日本てんかん協会の原田秀逸理事は「誤解や偏見をなくすためにも、正確な情報を積極的に発信していくことが重要だ」と訴えた。

2015年7月4日（金）南日本新聞17面